

伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇その13

草分けとしての竹友社

中島聖山

琴古流竹友社のことに關しては、既に第5回目と第6回目に、室蘭の女流尺八家で後に綜楽流を創始した佐藤富士江と、世界的な昆虫学者で尺八博士の異名を取った札幌農学校教授の松村松年に焦点を当てながら、宗家竹友社の師範名簿に載らなかった影の人材的存在だった二人が、いかに中央の尺八界から高い評価と期待を掛けられ、大きな影響力を持って活躍していたかを述べた。

そこで、今回は宗家竹友社の組織内において、流勢拡大に尽力を注ぎ、創成期に大きく貢献した道内在任の師匠たちの活躍ぶりを辿ってみることにする。

阿部凶介の活躍

函館を中心に道南地方で活躍した阿部凶介は、明治30年10月13日に新潟市で生まれた。社会人になって仕事にも慣れてきたのを機に大正5年から同市で教授所を開いていた三上精一に入門し、尺八の手ほどきを受けた。専門師匠の夢を抱いていた阿部凶介は、プロの指導を受けたと考え、大正11年に宗家竹友社の川瀬順輔に転門した。川瀬順輔に師事してからは芸道に拍車がかかり、仕事についていたものの半プロとして活躍した。



川瀬順輔

函館には川瀬順輔に転門した直後の大正11、12年に赴任してきたものと思われる。次第に古典本曲にひかれた阿部凶介は、津軽海峡を渡って津島孤松の門を叩き、錦風流根笹派の曲を学んだ。

錦風流根笹派はコミ吹きを特徴とし、津軽藩王の命を受けた吉崎八弥好道一風が、群馬県沼田市の田宝寺住職・栗原栄之助錦風に教えを受け、津軽藩に戻って藩王靈親や伴勇蔵建之らに伝授したことに始まる。阿部凶介が師事した津島孤松は伴勇蔵建之の直弟子だった。

こうして津島から錦風流根笹派の全曲を学んだ阿部凶介は、同好会を組織して古典本曲の保存普及にも力を注いだ。阿部凶介は仕事の関係で戦後一時盛岡に住んだことがあるが、昭和29年に盛岡の財務部長で退官した後、再び函館に戻り函館信用金庫の常務理事として第2の人生をスタートした。アマに徹し、多くの門下生を育てて世に出したが、主だった人としては柏倉彰堂、佐々木栄堂、大地正堂、進藤吉郎、金谷礼香、東吾妻などがある。

斉藤玉洞の来札

大正末期の宗家竹友社で道内唯一の専門師匠だった斉藤玉洞は、阿部凶介と同様新潟の人で本名を泉といた。鉄道官吏だった斉藤玉洞は、会津若松市に住んでいたころ、毎週土曜日の仕事を終えてから上京し、藤田鈴朗に入門して尺八を学んだ。藤田は美妙社を設立し、雑誌「三曲」をはじめ出版事業に手を

出していた。事業のほうは忙しくなったのであろう、藤田が社中を解散した後は、川瀬に転門し、大正7年から新潟市で専門師匠として

の道を歩みはじめた。

専門師匠として大成することを望んでいた彼は、新潟での教授に満足せず、大きな夢を描いて札幌に転居し、道内での活動を開始したのである。時に大正14年9月のことである。翌大正15年9月25日には、岩見沢市の空知会館で斉藤玉洞師の歓迎演奏会が開催された。斉藤玉洞は玉声会を組織し、多くの門人を育成するとともに、道内各地に玉声会支部を設置して活動の母体とした。

しかし、残念なことに道内での活動は短く、昭和7年頃までにとどまった。その後はまた会津若松市に戻り活動を続け、晩年は新潟県津川町に居を構えて余生を送った。昭和10年10月4日新潟県津川の自宅で、長い尺八人生にピリオドを打ち永眠した。

全道主要都市を結んだ師匠網

琴古流鈴巻会や都山流・上田流に比べ、竹友社が一番早く全道の師匠網を構築し、活動の母体を完成させた。大正14年9月に新潟から斉藤玉洞が専門師匠として、札幌に転居してきたことによって、そのネットワークは一層強化され、普遍のものとなった。

大正14年10月現在の師匠名簿には、函館の阿部凶介、小樽の大泉正一をはじめ池畑初三郎や尾山紫童、札幌には道内唯一の専門師匠である斉藤玉洞と阿部登吉、旭川の阪口實と三浦信三郎、夕張の稲村光三郎、網走の井上正夫、稚内の斉藤信一など総勢11名が列記されている。

このように道南、道央、道東、道北とくまなく全道をネットした特志師匠網は、札幌の専門師範である斉藤玉洞によって束ねられ、一丸となった活動母体として組織化されることになったのである。

門人育成競争の始まり

宗家竹友社の全国組織が整備されて行くに従って、各社中が競い合っ

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村楽器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日
●各種カードをご利用下さい。

社中規模の拡大に努めた。

大正14年から昭和6年にかけて、道内在住の師匠が申請した免許状の数をまとめてみると表のようになる。6年間で申請した免許状は実に149件で、最も多いのが齊藤玉洞の52件、次いで函館の阿部凶介が41件である。炭鉱の繁栄を裏付けるかのように夕張の稲村光三郎も21件で上位3人に入っている。不振なのは旭川で、2人の特志師範がいながら6年間で1件である。

階級としては初伝が最も多く92件で、全体の61%を占めている。次いで中伝の32件、奥伝の21件となっている。毎年25件余りの免許状を申請していたのであり、活気溢れる状況であった。

各社中単位で会結成

門人の数が増えてくると、音楽活動の母体となる会が自然発生的に組織されはじめた。函館の阿部凶介が組織した鶴声会は、社中の演奏会や講習会の開催母体となって、道南の尺八界を常にリードしていた。

また、大正12年春に統家から大泉家へ婿養子に入った大泉正一は、小樽への転居を機に鹿鳴会を結成して活発な音楽活動を展開しはじめた。資料の裏付けがないので明言は出来ないが、室蘭の統治郎と血縁関係にあったのではないだろうか。同じく小樽の尾山紫童は

竹鈴会を組織して、岩見沢にも進出し、広範な活動を展開した。札幌の齊藤玉洞は来札と同時に玉声会を組織し、盛んな演奏活動を繰り広げた。

川瀬順輔の直門で昭和4年春に管林署職員として常呂郡置戸村に転居してきた時谷高陽は、本名を繁蔵といい、網走の井上正夫と協力して門人の育成に当たり、多くの門人を育てて道東の竹友会充実の一翼を担った。

齊藤と阿部の二人三脚

琴古流竹友社が短期間に飛躍的な発展を遂げた理由の一つとして、齊藤玉洞と阿部凶介の強い協力関係をあげることができる。

大正14年9月に齊藤玉洞が新潟より、竹友社唯一の専門師匠として来札したときには、既に全道の特志師範たちの陣容は固まっていたし、都山流の畑中康山や上田流の青山呂僮のように、地元の特志師匠を派遣してほしいという強い要請に基づいて来道したのでもなかった。往々にしてこういう場合は、先に活動していた師匠たちとの折り合いがうまく行かず、互いに反目しあって組織の弱体化を生ずるものである。しかし竹友社の場合、後から入ってきた形となった齊藤玉洞を中心に、全道の師匠たちが協力関係を深め、組織強化の方向へと邁進した。それはとりもなおさず道内で一番の影響を持つていた阿部凶介の

度量の大きさによるものである。齊藤玉洞の来札を歓迎し、昭和2年8月27日に岩見沢の第二大正座で「齊藤玉洞歓迎演奏会」を開催した際、阿部凶介も遙々函館から参加したのである。

推論の域を出ないが、齊藤玉洞と阿部凶介は共に新潟出身であり、同郷のよしみとして互いに心を許しあう仲だったのである。

玉声会の飛躍的發展

大正14年9月に札幌へ転居して本格的な教授を開始した齊藤玉洞であるが、勢力拡大の速さには驚嘆せざるをえない。昭和2年8月の雑誌「三曲」に掲載された玉声会の暑中見舞い広告を見ると、札幌市北3条西3丁目の齊藤玉洞の自宅に本部を置き、新潟・秋田・会津若松など6か所に支部を開設している。北海道では岩見沢の許勢芳洞が唯一の支部として名を連ねている。

暑中御見舞

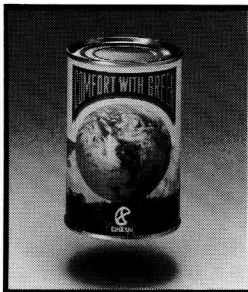
| | |
|---------------|-----------|
| 札幌市北三條西三丁目 | |
| 玉聲會本部 會長 齊藤玉洞 | 小 林 奎 洞 |
| 支 部 | 濱 本 晃 洞 |
| 石 山 秀 洞 | 酒 井 玲 洞 |
| 岩 田 山 本 洞 | 入 江 静 洞 |
| 岩 田 山 本 洞 | 佐 久 間 竹 洞 |
| 岩 田 山 本 洞 | 佐 伯 鳴 洞 |
| 岩 田 山 本 洞 | 許 勢 芳 洞 |
| 岩 田 山 本 洞 | 岩 田 山 本 洞 |

道外の5か所については、齊藤玉洞が来札以前に既に教授所としていた所か、指南の免許を与えて教授を許していた門人のところと思われる。従ってこの時点では、来札して2年あまりで開拓したところと言えは、札幌のほかでは岩見沢だけということになる。

しかし、この2年間で齊藤玉洞は専門家としての将来の見通しをたて、内地に残してきた門人たちをも包括する玉声会の組織化を決定するに至ったのである。その手始めとして昭和2年4月22日に札幌の円山公会堂で、道

大正14年から昭和6年までの免許申請状況

| 都市 | 申請師匠 | 初伝 | 中伝 | 奥伝 | 皆伝 | 特志師範 | 合計 |
|-----|-------|----|----|----|----|------|-----|
| 函館 | 阿部 凶介 | 23 | 10 | 7 | | 1 | 41 |
| 小樽 | 池畑初三郎 | | | | | | |
| | 尾山 紫童 | 1 | | | 3 | 4 | |
| | 大泉 正一 | 7 | 1 | 1 | | | 9 |
| 札幌 | 齊藤 玉洞 | 36 | 7 | 9 | | | 52 |
| | 阿部 登吉 | | | | | | |
| 旭川 | 阪口 實 | | | | | | |
| | 三浦信三郎 | | | 1 | | | 1 |
| 夕張 | 稲村光三郎 | 10 | 10 | 1 | | | 21 |
| 網走 | 井上 正夫 | 6 | 4 | 2 | | | 12 |
| 稚内 | 齊藤 信一 | 9 | | | | | 9 |
| 合 計 | | 92 | 32 | 21 | 3 | 1 | 149 |



45億年分の1。

推定年令、45億年。
 壮大ないくつもの変遷を重ねてきた地球に、
 私たちは今年1年どれくらい思い入れができるだろう。
 少しずつ、着実に、地球の生命と人間の関係を親しくしたい。
 1991年、創業100周年——地球を、人間を、
 未来を見つめた共生空間の創造を続けながら、
 私たち地崎工業は次の時代へ歩みます。



考えたいのは、地球の未来です。
 株式会社地崎工業

内の竹友社で最大の勢力を有していた阿部凶介を招聘し、組織化を祝う記念の演奏会を開催したのである。この「玉声会支部発会記念演奏会」の開催によって、齊藤玉洞と阿部凶介の協力関係が生み出されたのではないだろうか。

齊藤玉洞のもう一人の支援者は、札幌農学校教授の松村松年博士である。松村松年は明治中期から尺八を吹いて川瀬順輔夫妻とも親交が深かったし、地元北海道の邦楽界についても精通していた。彼はあくまで趣味として尺八を続けようとしていたので、齊藤玉洞が専門家として生計が成り立つよう、最大限の協力をしたものだと思われる。その証拠に齊藤玉洞が来札して最初に開催した演奏会は、大正15年5月22日に豊平館で行った北大八千代会との合同演奏会である。

来札して8ヶ月足らずの齊藤玉洞が、単独で演奏会を開催できるはずがなく、この会は松村松年が会長をしていた北大八千代会の力によるものであろう。時を待たずして北大玉声会が組織されたのも、齊藤玉洞の来札を機に、北大八千代会を発展的に解散した松村松年の取り計らいがあったからではないだろうか。

以上のような協力者たちの支援を受けて、昭和2年正月にわずか1か所だった道内の支部は、2年後の昭和4年正月には8か所に急増している。しかも北大玉声会を始め、帯広・室蘭・北見・釧路・遠軽・今金・栗山とはば全道をネットするまでになったのである。

川瀬順輔を招いての演奏会

大正12年4月、竹友社宗家の川瀬順輔は里子夫人と井村豊子を伴って来道した。4月14日には函館市公会堂で川瀬順輔師歓迎の演奏会が開催された。主催は阿部凶介が主宰する鶴声会で、地元糸方として川内佐登治らが賛助出演した。翌4月15日には小樽市倶楽部で同様の川瀬夫妻歓迎演奏会が行われた。主催は大泉正一が主宰する鹿鳴会である。この時札幌では記録に残るような演奏会は行われていないが、恐らく札幌農学校の松村松年らが中心になり、川瀬夫妻を囲んで合奏会を開催したのであろう。

松村松年は早くから北大八千代会を組織して、毎年邦楽の会を開催していた。大正14年秋に齊藤玉洞が来札したのを機に、翌年の大正15年5月22日には北大八千代会と玉声会との連合演奏会を豊平館で開催した。この記念すべき演奏会には、東京から川瀬夫妻と糸方の井村豊子が賛助出演している。川瀬一行は5月17日に東京を出発し、秋田の演奏会に出演後、札幌に向かったのである。この北大八千代会と玉声会との連合演奏会が、宗家竹友社の札幌における最初の公式な演奏会ではなかったか。

川瀬一行は札幌で数日間を過ごし、22日には旭川に向かって地元三浦信三郎らが主催する歓迎演奏会に出演した。当時旭川には第7師団に勤務する尺八愛好家が多く、川瀬順輔直門の阪口實もその一人で、師団の法務官として働いていた。また、三浦信三郎は旭川の山田流箏曲の草分けとも言える三浦栄洲の夫君で、夫婦そろって三曲の発展に尽力していた。

齊藤玉洞が単独で演奏会を開いたのは、昭和2年2月20日に、太平館で「玉声会尺八演奏会」を開催したのが最初であらう。齊藤玉洞の歓迎演奏会は大正15年9月25日と昭和2年8月27日の2回、いずれも岩見沢で開催されている。最初の会は正しく専門師範の齊藤玉洞の来道を歓迎するものであり、地元の飯田源三郎や許勢芳洞らが中心になって催した内輪の会だった。これに対し昭和2年夏に開催された会は、許勢芳洞の師範昇格と岩見沢支部開設を祝う会を兼ねるものではなかったのだろうか。阿部凶介や玉声会本部付けになっていた小林奎洞らが賛助出演しているからである。

昭和2年10月2日には第2回目の玉声会尺八演奏会が、同じく太平館で開催されている。この会には東京から宮下寛一や草野達二らが賛助出演した。

次第に地元糸方の支持も得られるようになった齊藤玉洞は、昭和3年6月3日に開催した第3回目の演奏会に、初めて中徳校や新田佐美治など地元有力糸方社中の賛助出演を得たのである。

松村松年が統括していた北大八千代会の解散とともに、北大玉声会を組織して学生を掌握した齊藤玉洞は、毎年2月に卒業演奏会を企画実施することにした。昭和4年2月16日午後5時から第1回目の北大玉声会主催の卒業生送別演奏会が今井記念館で開催された。このような北大卒業生のための送別演奏会は、都山流北大康琳会や琴古流北大鈴韻会なども行っていたので、他流を意識したものだったのかもしれない。

昭和4年3月2日に鉄道倶楽部で開催された札幌玉声会の春季演奏会では、土曜日の夜にもかかわらず、会場となった鉄道倶楽部の2階ホールは満席の状態だった。糸方には中徳鳳琴、江釣子美世井、杵屋栄喜音、秋田智代などの賛助出演を得て、本曲「秋田菅垣」「真虚鈴」「箏曲」「新高砂」「千鳥の曲」「近江八景」「磯千鳥」「末の契」、長唄「小鍛冶」「吾妻八景」など12番を演奏した。

昭和4年正月現在の玉声会支部

| | | | |
|------------|-------|---------|-------|
| 北海道帝大玉声会代表 | 稲本 陽洞 | 秋田県大曲町 | 山本 玉弘 |
| 新潟市西港町 | 高橋 悦洞 | 秋田県毛馬内町 | 立山 廉吉 |
| 新潟市古町 | 小崎 蓉洞 | 北海道帯広町 | 浜本 晃洞 |
| 新潟県長岡市本町 | 渡辺 松洞 | 室蘭市母恋町 | 許勢 芳洞 |
| 新潟県刈羽郡鯨波 | 石山 秀洞 | 野付牛町 | 織田 鈴洞 |
| 新潟県中魚沼郡十日町 | 入江 静洞 | 釧路市西弊舞 | 佐藤茂十郎 |
| 福島県若松市駅前 | 早津 昌洞 | 遠軽町 | 長谷川豊洞 |
| 秋田市 | 保坂 玉風 | 今金町 | 前原 玉昌 |
| | 佐久間竹洞 | 栗山町 | 長尾 玉秋 |
| | 佐伯 鳴洞 | | |



日本舞踊のお写真なら (ポーズ、舞台)

藤本写真館

(各地出張撮影も致します)

<スタジオ> 札幌市豊平区平岸4条4丁目 4-10 TEL821-3515 ●駐車場あります。